平成３０年度
第２回松島町総合教育会議

日　時：平成３１年２月１５日（金曜日）
　　午前１０時００分～１１時１５分まで

場　所：松島町役場　２階　２０１会議室

松島町教育委員会

平成３０年度　第２回松島町総合教育会議録

招集月日　　平成31年2月15日（金曜日）

招集場所　　松島町役場2階 201会議室

出席者	松島町長	櫻井公一
	教育長	内海俊行
	教育長職務代理者	瀬野尾千恵
	委員	鈴木康夫
	委員	佐藤　実
	委員	赤間里香

事務局	教育次長	三浦　敏
	教育課長	赤間隆之
	教育課学校教育班長	大宮司　綾
	教育課学校教育班主査	佐藤弘也
	総務課長	千葉繁雄
	総務課総務管理班長	櫻井和也
	総務課総務管理班主査	大久保哲也

会議日程

１．開会　　平成30月8月6日（月曜日）午前10時00分　開会　（録音開始）

２．挨拶

３．議題

　（１）　松島町立小学校における学区の再編について

４．閉会　　午前11時15分　閉会　（録音終了）

１．開会

○櫻井班長
　定刻前ではございますが、ただいまから松島町総合教育会議を開会いたします。
　まず初めに、櫻井町長より挨拶を申し上げます。

２．挨拶

○櫻井町長
　改めまして皆さんおはようございます。
　本日は、松島町総合教育会議にご出席をいただきまして、本当にありがとうございます。
　また、教育委員の皆様方には、日ごろから本町の教育行政に多大なるお力を借りておりますことに感謝申し上げたいと思っております。また、特にことしは年明け早々に教育委員会を開いていただきましたことなど、本当に感謝申し上げます。
　さて、本日の議題でありますけれども、松島町立小学校における学区の再編についてであります。本会議におきましても、教育委員の皆様から忌憚のないご意見をいただきまして、実りある総合教育会議としたいと思いますので、よろしくご指導お願い申し上げます。
　本日は、最後までどうかお願い申し上げまして、挨拶にかえます。ありがとうございました。

３．議題

（１）松島町立小学校における学区の再編について
○櫻井班長
　それでは、これより議題の進行のほうは内海教育長様にお願いしたいと思います。
○内海教育長
　それでは、私のほうから進行させていただきますが、お手元のほうに資料を差し上げておりましたので、それをもう一度確認する意味で、三浦次長のほうから説明をさせていただきます。それをごらんになって、学区の再編について、いろいろな視点からご意見をいただければ、この所期の目的、この会の目的が達成できるのではないかと思いますので、では、三浦次長からコンパクトに説明してください。
○三浦教育次長
　では、事前に一度皆様にご説明している場がありましたので、簡単にいきたいと思います。
　では、資料の1ページをごらんください。
　松島町立小学校における学区の再編ということで、見出しをつけましたけれども、事務局といたしましては、一番将来の、4つの学校のうちの一つの松島第五小学校が、特に今後、どんどん小規模化が進んでいくということに着目して話を展開しております。
　そこの現状の把握ということですが、特に、北部の拠点の子育て、幼稚園も含めて、第五小

学校が拠点になっているわけなんですが、ここに着目をして記述をしています。

現状として、白丸、よい面ですね、すごく地域とも密着しながら少人数のところでわかる授業を展開していると。最近の標準学力検査の結果でも、その成果があらわれているというふうに思います。現在でも「学校おでって隊」というような方々に協力をしていただいて、地域からも支えられている学校であります。

黒丸にマイナス面を上げましたけれども、やはり、ただ少人数が進んでいきますと、いい点もあるんですけれども、いろいろな弊害も出てくるということで、ある程度の人数での社会性を培うのがなかなか難しくなるであるとか、あるいはどんどん進んでくれば、複式学級になるということでのマイナス面があります。

最後の2行に書きましたけれども、今後、コミュニティ存続あるいは中核的な施設と位置づけるならば、くぬぎ台等の、まだまだ子どもたちも、今、生まれていますので、そういうことを考えるならば、第五小学校の引き続きの存置が必要になるかなというふうに思います。

参考資料の説明をさせていただきます。

資料1としては、今後6年間、現在の各年齢の子どもの数から割り出した予想値、あくまで予想値ということでお話しします。現在、79名の全校児童ですが、6年後には66名ということで、大分減ってくるということになります。その後の統計はまだとっていませんけれども、複式学級が出始めるのは、50人を切ると複式学級がある学年が出始めるということがありますので、これを何とか食いとめたいと。食いとめるためにはどうしたらいいかということでの話になります。

資料2としては、各学年の在籍人数、現在ですけれども、大体13名程度で各学年在籍しております。

2ページをごらんください。

資料3については、現在のハード面の第五小学校の建物は大丈夫なのかということなんですが、昭和61年に落成しておりますけれども、その後、体育館が平成16年で新しくなっておりますし、太陽光をつけたり、あと27年に校舎の屋根の修理完了などもしております。今後、長寿命化計画等で維持管理をしていけば、まだまだ十分使える校舎であるというふうに考えております。

そこに適正化、第五小学校をどうしていくかという方策を2つ上げております。

1つは学区の見直し、2つ目が小規模特認校の活用ということでございます。

基本的には、学区の見直しは一時的な、人数的に効果は大きくないかもしれませんので、最終的には小規模特認校のような学区の見直しということが必要になってくるかなというふうに考えています。

3ページです。

まず、学区の見直しについては、現在、第二小学校が168名となり、第五小学校が79名なんですけれども、一番最後のカラー刷りの地図をごらんください。旧小学校の学区図です。

ご存じのとおり、現在の第二小学校学区に旧三小学区、あと旧四小学区の子たちがあわさって、今、第二小学校に通っています。案としては、第五小学校に隣接した学区である第四小学校区の子たちが移動したらどういう人数になるのかなということで、シミュレーションしたものです。

3ページに戻ります。

第四小学校区から二小に入っているのが14名ということで、単純に現在の79名の第五小学校に14名を足しますと93名になって、90人前後の規模になるだろうということですが、ただ今後、資料4、今後の入学者数というのは、第四小学校区から入ってくる1年生を全部五小に入れたとしても、1名から3名というような少人数という推移になってきますので、今後、新入生を第五小学校に組み入れたとしても、1名、2名、3名の入学生しか見込めないということにはなります。

現在の、資料5ですけれども、三小学区には16名、四小学区に14人という在籍で、第二小学校にバス等で通っていると。全体の23％ということでございます。

資料6については、町内の小中学校の今後の6年間の動きでございます。

第五小学校に焦点を当てていますから、第二小学校などについても、6年後には30名減るというような段階ですので、第二小学校もそう遠くないときに100名を割る時代が出てくるのかなということです。

松島中学校は、昨年は270名ということで、ぎりぎり1学年3クラスがぎりぎりのラインになってくるのかなと思います。

4ページは、現在の通学区域ということで、詳細な小字に基づいた区割りになっております。

ここの（2）については、予定の年度はまだ入れていませんけれども、今後、第四小学区の子たちを入れてくる場合の段階的な素案を示したものでございます。

5ページです。それでは、例えば四小学区の子たちを入れる以外の方策はないのかということでの一つの話題が、小規模特認校制度というものでございます。これは、資料8にありますように、県内では亘理町の高屋小学校を初め5つの小学校あるいは小中学校で展開されているものです。いずれも平成17年度以降、新しいものでは昨年度から開始したところもあります。規模としては、大体第五小学校よりも小さい規模で展開していると。あと、備考欄にありますけれども、町内だけの入学を許可しているもの、あるいは町内、町外を問わずというようなほうをとっているところもあります。

上の（1）から（6）に示したとおり、やり方は町でいろいろ決定、詳細は決定しながらできるということです。文科省の認可は特に必要はなくて、町独自で設置ができるという点があるのかなということでございます。

6ページ以降につきましては、法令関係のものでございます。参考資料9に示したものは、小学校の学級数の適正規模というようなものが述べられていますが、小学校は2クラス以上あると、クラス替えもできるのでということですが、現在、県内でも単学年、単学級の学校も、二小のほうなんですけれども、多くなっているというふうに思います。

参考10については、文科省の手引から入れたものですけれども、小規模を残す場合には、小規模のメリットを生かしながら、デメリット緩和をしながら残すべきであるというようなことが述べられております。

7ページの参考資料11については、先ほどの小規模特認校というのはどういう種別になるのかなということですが、実は、小規模特認校という言葉は、文科省では使っていなくて、特認校制という中に属します。従来の通学区域は残したままで、特定の学校について通学区域に関係なく、どこからでも就学を認めるものというような種別に入っております。

現在でも、本町の区域外就学を認めるものについては、近接の、例えば第二小学校の学区なんだけれども、第一小学校のほうが、その地域にとって近い、親がそして第一小学校に通わせ

たいという場合には、一部認めているということという部分もあります。
　小学校設置基準のところで、ただ複式学級、これ例えば1、2年生合計して16人以下になると、もう複式学級の対象ですよというような基準が示されております。
　簡単ですが、説明を終わります。以上です。
○内海教育長
　ありがとうございます。
　まず、今の説明について、ご質問ございませんか。
　なければ、議論に入っていきたいと思いますが、まず口火を切っていただく方、誰かいらっしゃいませんか。（「ちょっと質問」の声あり）鈴木委員。
○鈴木委員
　特認校制、これは先ほどご説明があったけれども、何か文科省から、あるいは何かそのほかのルール、あるいは資金面とか、何もないんですか。
○三浦次長
　文科省からの認可を受けてということではないので。
○鈴木委員
　ただそれだけのこと。
○三浦次長
　はい。
○鈴木委員
　何もそのほかは、何もないんですか。何もない。報告もない。報告義務とか何か。
○内海教育長
　私が言うのもあれなんですが、確認したところ、文科省に直接私、確認したところ、特にないと。書類の提出とかは、今はないという話でした。ですから、町独自で。
○鈴木委員
　そうですか。
○内海教育長
　もちろん、それに対しての補助とかもございません。佐藤委員さん、お願いします。
○佐藤委員
　その話に入る前に、町長さんに、あの区域、今、五小という区域ですが、あの辺に今後造成をするとか、そういうことというのは、こういう場で言えるのかどうかわかりませんけれども、そういう見通しなり、お話というのは、あるわけですかね。
○櫻井町長
　きょうは、多分最後のほうにその話が出てくるかなと思ったんですけれども、この間、昨年ですね、松島町の行政として、12行政区の役員の方々を主体とした懇談会、行政懇談会をやらせていただきました。そのときも幡谷地区に行って説明は申し上げましたけれども、一応、町としては土地利用計画というものを新たに掲げて、品井沼駅前を少し開発しようということで、今、考えてはおります。
　くぬぎ台ができて、第五小学校があって、それからくぬぎ台の、方角的には東部から駅のほうに向かっての土地、約9.2ヘクタールぐらいあるんですけれども、そういったところの土地の方々に、なかなかよその方々がそちらの土地を購入しても家を建てられないという状況にあ

りますので、そういったものを全部外してもらおうと。また、既存の、今お住まいになっている方々が、例えばアパートを建てたいというのであれば、どうぞみたいな形になる、そういういろいろな規制を撤廃していただこうという働きをずっとやってきまして、やっとここへ来て進んできた。正式には、ことしの新年度に入って6月か7月には、県と最終的に合意をした文書を交わすことになります。そういったことになれば、駅前についてはおのずと開発が入ってくるというふうに思います。

それから、松島町とすれば、そこを重点的にやっていまして、県のほうには、あともう一カ所、これはどうしても駅を中心にしたということで、土地利用を見ていただいていますので、最終的には愛宕駅も含めて、品井沼、愛宕と2点の土地利用をお願いをしています。これらについての地域の説明会はやっていただきまして、この間、品井沼の農村改善センターというのがあるんですが、そちらで土地利用計画だけについて、地権者の方が約100人ぐらいいらっしゃるんですが、半分ぐらいの方が出席していただいて、この説明を申し上げたということで、皆さんからは、大方好評の意見をもらったのかなということで、了解を得ています。

そういったことで、そういうふうなものを、今後進めていきたいということは、町では考えています。

○佐藤委員

見直しをするときに、やはり教育行政という面からだけではなくて、そういう町の行政の、今後どういうまちづくり行うのかということによっても、どちらがいいのかなというようなことも含めて、変わってくるのかなというふうに思って、こういう質問をさせていただいた。

では、町長の発言ですと、今後ふえる予定はあるということと。

○櫻井町長

それで、もう一つだけ、内海教育長さんに町のほうからお願いしたのは、第四小学校が第二小学校に通うようになったというのが、いろいろな経緯があって、震災があって、それで校舎が使えなかったということも一部あって、そういったことで二小ということで、本来ならば学校が近いんだから五小はどうだというふうになるんでしょうけれども、そういったことで、あのときの経緯があったんですね。

それ以降、ずっと例えば敬老祝いとか何かで、いろいろな地域、四小学区でも特にこのカラー図面でいくと上のほう、行政でいくと下竹谷になっておりますけれども、そういったところに行くと、うちの子は、わざわざここから二小までまだ行かなくちゃならないですかねと、相当数の距離があるんですね。だから、そういったものについて、教育長には、学校の再編というか、そういったところの見直しを、もうちょっとしてもらったらどうなんだろうかと。強制的にいくか、フリーでどちらでもいいですよといくかは別として、そういったことをちょっと考えてくださいというのは、前段で言った具合にはお話ししておりました。

○佐藤委員

今のことですと、学校選択制というちょうど資料がありましたけれども、その中の特定地域選択制ということで、問題が解決しないかなというふうには思っているわけですよね。今も市町村によっては、ちょうど真ん中にある地域、自由選択制というか、どっちの学校に行ってもいいという、そういう選択を条例の中でしているところもありますよね。ですから、特定地域選択制というのは、それだというふうに思いますけれども、そういう形では、四小に当てはめられないかなというふうに思ったりはするわけです。

○内海教育長
　そうすると、今ちょっと話があれなんですけれども、特認校よりは、特定地域選択制のほうが、7ページの真ん中あたりですね、従来の通学区域は残したまま、特定の地域に居住する者について学校選択を認めるみたいな案も、一つあるのではないかという、そういう意見ですよね。
○佐藤委員
　そういうことです。私はそういうほうがいいなと思っておりますけれども。そういう方法を、もし四小だけの問題という、今の、さっきの町長さんのお話でいうと、こういう方法もあるのではないかなというふうには思った……。
○内海教育長
　四小だけに特化すると、特定地域選択制がいいかもしれないと。ただし、全体のことを考えると、特認校制がいいと。もう一つ、実委員さんの、詰めさせていきたいんだけれども、特認校がいいという理由は何かありますか。
○佐藤委員
　私はやはり、町長さんのお話を聞いて、これから児童数がふえていくかなということになりますと、それでもいいなという思いは、特認校じゃなくいいかなという思いはあるんですけれども、特認校にしますと、やはりどうしても人を集めるために、特色ある学校経営というのが物すごく大事になってくるんだろうというふうに思いますね。そういうときに、私は五小には特色あるなというふうに思っているわけですよね。
　まず、何といっても全国に知られているどんぐりという、「どんぐりころころ」の歌の発祥の地であるという、それからあそこ、地域が農村地帯であるという意味で、いろいろな特色ある活動ができるのではないかなということ。それから、私はあそこに卒業式とか運動会で行ってみて、地域のコミュニティといいますか、地域の方の物すごい協力体制がある。そういう中で、やはり特色ある活動ができないだろうかと。全国に発信する、全国というと余り大げさかもしれない、県に発信できる、そういう教育、壮大みたいなことがあるなというふうに思っているわけですね。
　あとは明治排水路とか、江戸の排水路とか、ああいうところも使って特色ある教育、そのことによって、学区制を撤廃することによって、人を集められないか。できたら県内先ほどあった中で、市外というのは2つだけだったでしょうか。塩竈市……、どっちだったか、花山でしたか、市外も含めて。というのは、市外も入学可能になると、あそこ品井沼という駅があるので、これ今、不登校というようなこともあって、できたら親御さん、特色あるそういう学校に入れて、何とか解決できないか、改善できないかと思っている親御さん、多いのではないかというようなことからして、私は、特認校というのをぜひ松島にもつくったらどうだろうなというふうな思いがございます。
○内海教育長
　ありがとうございます。今、特認校の話になりましたが、また別な視点で、何かご意見がありますでしょうか。瀬野尾先生、お願いします。
○瀬野尾委員
　今、実先生がおっしゃった特色ある学校づくりに関しまして、松島へ来てからずっと松島の魅力を感じながら、もう県内だけではなく全国へ発信すべきだとずっと言ってきているので、

そのことに対する学校づくりの夢は、いまだに消えずにありますので、本気で実現するならやるべきだと思うんですね。ただ、今のきょうの話題には出ていないんですけれども、小学校3つと中学校1つの現在の学校数を、町として、特に特認校になっても全部文科省の許可は要らないけれども、お金も全部町でやるんだよという話ですので、やはりそれを充実させるだけの予算というのを、どうしても私は考えないと、その実現はやはり難しいなと思うんですね。

そうしたときに、これは町ぐるみ、大きな問題になるかもしれませんが、今、小学校3校、中学校1校というところに、ひとつメスを入れて、それをあわせて特色ある学校づくりということを考えていく時期ではないのかなと、これは本当に労力を使う問題ですけれど、他の幼稚園とか保育園とか、いろいろな総合的なことを考えていったときに、今、方向をあわせて考えないと、ばらはらに計画することになるのではないかなと思っていまして、そこがちょっと、どうしても引っかかります。

○内海教育長

ありがとうございます。鈴木委員さん。

○鈴木委員

基本的には、町の人口減少に歯どめをかけないと、町の中で動かしても、やはり出ていくんです、基本的に。そうすると、抜本的にやはり子育て世代を外から入れてこないとパイがふえないので、中でちょこちょこいじくったって、またちょっと何年か後にはってことになる。したがって、今できることは、やはりもう先生方がおっしゃるように、特色ある学校づくりを発信するということしかないのかなと、我々は。そこを具体に戦略をつくる。

いや私、あることだけれども、この間、青葉区の発明クラブってご存じですか。びっくりした。小学生、英会話で何か発明の、毎月やっているんでしょう。（「毎月」の声あり）いや、すごく集まってくるんだって。青葉区だけでなくて西多賀のほうとか、物すごくふえているんですよ。補助金もあるんですよ。それで企業なんですよ。企業の人たちと教育の先生。あれは集まって、例えばあれは特色ありますね。それも発明、アイデアを起こさせるのを英語でやっているんですよ。小学生ですよ。驚いちゃったな。これは特色ある、集まってくる。何かちょっと、何でもだけれども、やはりそういう、余りちょっと奇をてらうというようなのではなく、そう思われてもしようがない。でも、奇をてらうんじゃないね。根底からきっちりと発信していくって、何かそういう、何か発信が今必要、松島。そうやって人口流出、人口をとにかく、どこの市町村も同じことを抱えているんでしょうけれども、競争だと思うな。

やはり教育を武器にして人を何とか集めるという戦略もあっていいんじゃないですか。観光も大事だけれども、教育で人を集めるというふうな、ちょっと極端ですが。そうじゃないとなかなか、だから、五小、二小、一小もいいでしょう、四小をどこにするというのも、極めて大事ですよ。大事だけれども、もう少し先もつくらないと、そしてあともう一つ、やはり学校は、学校の教育のあれというのは、地域がつくる。国がこういう制度をいろいろつくるんだろうけれども、そして適正なのは何人だ、何人だ、複式は何人だとかと国は基準をつくっているけれども、それは国が言っている基準になっているんでしょうけれども、地域がそれは独自にやっていいのではないのかなと、私は思う。そういう特色をつくっていくというのを、何かそういうふうに感じています。

○内海教育長

ありがとうございます。

そうすると、特色ある学校づくりでも、奇をてらうというわけではないんだけれども、やはりキーワードとして教育で人を集めるとか。

○鈴木委員

とにかくやはり、町自体が何か出ていく。難しいけれども、そのくらいの気概が。

○内海教育長

それは、鈴木委員さん、全ての一小、二小、五小、全部ですか。（「全部だね」の声あり）中学校も一緒。（「うん」の声あり）

今のご意見について。瀬野尾委員。

○瀬野尾委員

まさに鈴木委員さんがおっしゃって、鈴木委員さんもいろいろご存じかもしれませんが、松島に来たときから、例えばインターネットで松島はこういう教育をやっていると特色を発信しますと、海外から帰国する親御さんはチェックしていて、自分がどこへ住むかまでしていますので、問い合わせが来るんです。（「そうすると、教育が大事ですね」の声あり）学校に直接に。だから、少なくともずっとそれを言っていたのに、なぜできないかなんです。私から見ると。どうして「いいですね、いいですね」といつもなるんですが、じゃあそれが具体的に動きますかというと、全然動かない。今回、学校のホームページができましたので、これを見ながら、いろいろな親御さんから反応があるというのも、一つですよね。

だから、例えば今、お話ししたような、こういうところを一度学校の特色として取り組むんだと。それをどう発信するんだということを、さっき本気でと言いましたのは、それを本気で、会議で終わって、ああそうだねで終わるのではなく、何年間もたっているのにと思ったりして、似たようなアイデアはいろいろなところがもうやっているんですよ。申しわけないけれども先を越されましたねと何度か私、言ったことあるんですが、それができない松島は、何なんだろうと思うんです。ちょっと熱くなって済みませんが。できると思いますよ。資源面とか特色とか。なぜできないんですか。

○内海教育長

佐藤委員。

○佐藤委員

学区の再編というところから、本質的なそういう教育論になっているようでありますけれども、私もそれは思うわけですが、将来的な松島のあれを見ると、小中一貫校というのが一番いい形でありますね。ただ、物すごい財政がかかるというわけでありますから、これはいろいろと町長さんも思案のしどころなんだろうというふうに思うものですから、余り私も委員としては言えないんでありますけれども、小中、このデータだと756人、36年はね、そういうようなところまで、今のところだと平成36年の756人、小中で。そうすると小中一貫校みたいなことが一番いいんだろうというふうに思います。学区の再編ということでの意見で言うとですね。

さっきの特色というところに、その意見も言うと、親御さんが、今、先ほど発信したときに飛びついてくるのはどういうところの学校の特色なのかというと、今、鈴木委員さんが言った英語とか、英語を一生懸命やっているとか、例えば情報を一生懸命やっているとか、それから不登校が全然いない学校だとか、それから、隣の塩竈というところは島に、学校だけれども、島民は1人、しかし五十何人かいるでしょう。これは何なのかというときに、海というそういう教育資源なんだろうなというふうに思うのと、もう一つは演劇をやって人づくりをやってい

るんですね。そういう特色を発信していかないと、なかなか松島の教育について支持はされないのかなというふうに思うわけでありますけれども、その辺をどのように今、瀬野尾委員さんがずっとお話をしていたんだけれども、なかなか難しいところがあると。その辺はしっかりと、町として検討しなければいけないのかなというふうな思いがあります。ですから、支持される要素というのもあるのではないかなというふうに思っておりますね。

○瀬野尾委員

よろしいですか。そこでですね、やはりお金かなと私、思うんですよ。確かに鈴木委員さんがおっしゃったように、企業は飛びつくんです。例えば億というお金はなかなかもらえませんが、100万単位ですと、例えば校内にＬＡＮを引いて、それからパソコン、もう何年も前の話ですよ、出かけのころはそういうことをする学校へ、もう100万単位でお金を出してくれますから。それは学校規模、一つの学校規模としては、インターネット環境を整えるのには随分助かるとか、そういう企業が乗ってくれるような事業を考えるというのも、一つなんです。ただ、校舎の維持費とか、この間の利府の学校も見ましたけれども、私はこの間、英語をやるのに毎回自分のパソコンを、重いのを持っていって頭出しをしながら、途中で別な学年の違うところを出すには、こうやりながら、時間を無駄にしながらやらなきゃないのに、あそこにはもうパッとついていますからね。

一つの例を上げれば、それなりにやはり環境というものを整えなきゃない部分があるので、そのお金というのは相当なものなんですね。ですから、私はもう、できれば学校は松島で1校でもいいんじゃないか。または、競争させたいとか、特色をはっきり出したいなら最低2校、小学校は2校にして中学校は1つにするとか、規模を少なくする。その残ったお金を、ほかへやるのではなく教育で使う。または、各世帯が、1世帯500円でもいいから教育支援費を町民が出し合って、学校教育を支えると、そういうようにしていかないと、町で学校を、教育をしようというところにならないなと、これはどうモチベーションを上げるだけじゃなくて、やはりお腹がすいてはエネルギー持てないので、どうしてもそこは必要なところではないかなと思うんですよね。

○内海教育長

ありがとうございます。

今、特色あることということで、支持される要素というのは何か、学校としてというのは、これは考えていかなければならないんでしょうけれども、また、瀬野尾先生のほうからは、特色を出すんだったら、もうちょっとコンパクトにしたほうがいいんじゃいなかというご意見も、今いただいたところです。

それで、赤間委員さん、地元に住んでいるということで、変な振りなんですけれども、ちょっとお考えをお聞かせ願えればと思います。よろしくお願いします。

○赤間委員

まず、根本の部分からいくと、私はずっと思っているところなんですが、小学校ってやはり歩いて通う、近くに通うというのが一番の理想。だから本来ならば、5つあるから小学校を、今3つに減らした。三小、四小もそのとおり残せる方法を考えられるのが一番よかったとは思うんですが、それは財政的な部分とかというのがあってできなくなった。今、旧四小と旧三小のお子さんが二小にバスで通っているというところを見ると、バスに乗り込む子どもたちを見ていると、お友達とバスで帰れる、楽しそうは楽しそうなんですが、ちょっとこの子たちって、

登下校で本来は歩いて通っているときに、味わえたことが味わえない、それがすごくかわいそうだな。

ただ、果たして今、今回五小を存続させるということを前提とした会議なんでしょうけれども、五小に関しても、今、いろいろデータを出していただいていますが、ずっといくと、多分36年には66人、複式の一歩手前ですよね。この時点で、果たして今、学校に近接して地区計画をやって、くぬぎ台というのをつくりましたが、今、くぬぎ台のお子さんて、多分五小の7割以上、そのくらいはいますね。（「そのくらいです。6から7となっていました」の声あり）多分、この36年度といったら、もしかしたら、くぬぎ台以外のお子さんは1人、2人になりませんか。そうなったときに、今、実先生からさっきお話がありましたけれども、五小というのは地域が支えているというところの話があるんですが、やはりくぬぎ台って、ちょっとやはり、もともとの五小学区とちょっと違う。ちょっと違うんです。少しずつ距離は縮まってはきているんですが、ちょっと違うんですね。

今、五小を地域で支えているのっていうのは、五小を卒業したお子さんたちのお母さん、お父さん、それからおじいちゃん、おばあちゃんで、くぬぎ台の人よりも、多分そっちが今、地域を支えているんだと思うんです。今、そうやって地域を支えている人たちが元気なうちは、多分、自分の子どもたちが、孫たちが五小にいなくても、多分地域としては支えられる地域だというのは、やはり幡谷としての自負はあるんですね。それが、どんどんおじいちゃん、おばあちゃんたちも年をとり、お父さん、お母さんたちがおじいちゃん、おばあちゃんになったときに、果たしてその地域で支えられるのかどうかというのは、非常にちょっとわからない。そうなったときに、果たして五小って、地元の立場からすると、どうしてもやはり残したいと。自分の子どもたちが出た学校だし、やはり地域に学校がなくなるということは、何か光がなくなってしまったような感じで、どうしても残したいというのもあるんですが、残していいものかどうか。

それと、一番はやはり、ほかの先生方がおっしゃっていたように財政の問題。小さくても特色があれば残してしまっていいのかどうか。特色の部分からいくと、農村部、実先生がさっき農村部だったり、農村部でいろいろな体験ができるとか、それからどんぐりころころの里だとかというお話、ありがたいお話をほかの方からいただくと、地元としてはありがたいんですけれども、今、五小って学校田すらできない状態になっているんです。そうなったときに、学校田をやめて、多分五、六年になるんですけれども、学校田もできない農村部の学校っていうのが、果たして特色のある学校になれるのかどうかというような疑問も、客観的に見ると。残したいという気持ちはありますが、果たして残すべきものなのか、そういったところは非常に、ちょっとまとまらないんですが、悩むところがあって……。

○内海教育長

悩ましいというところですね。

○赤間委員

そうですね。

○内海教育長

残したいという気持ちはあるんだけれども、残すことが本当に……。

○赤間委員

残せるかどうか。例えば、あと10年後、20年後に、自分ももうすぐお迎えが来るような年に

なったときに、果たして今のような情熱を持って地域の学校といって盛り立てていけるのかどうか、周りの人と一緒に。周りの人たちも、そういう情熱を持って続けられるのかどうか、それを後世に伝えられていけるかどうかというところからすると、やはり、ただ、さっき鈴木先生がおっしゃったような、英語でいろいろな活動をされて、企業から資金を、補助金などを持ってきて、何とかやりましょうというのもいいと思うんですが、やはりそのためには、五小みたいな学校って、やはり地域と離していっていいのかというところからすると、果たしてできるのかなと。本当にまとまりませんでしたけれども。

○内海教育長

いえいえ、では、鈴木先生。

○鈴木委員

私、思うんですけれども、今のうちから地域と課題を共有して、だって例えば、あそこの小学校がなくなったら、きっと新しい人、若夫婦来ないよ。（「そうですね」の声あり）人口流出して、年寄りしかいなくなるんでしょうね。そういう今の地域課題を、今のうちにくぬぎ台ならくぬぎ台、昔からの人と共有して、ここどうするということをやはり、今のうちにやらなきゃないんでしょうね。どうするって、やはりなくしていいの、いやなくしたくないってみんな言うに決まっているんですね。そうしたら、なくさない手だてを、今のうちに何か手を打たないとまずいなということでしょうね。

だから、五小だけではなくて、私は町自体も学校も、だって全体に、このデータを見ると減っているんですよ。減っていると。これはやばいなと。やばいです。今のうちに手を打たないと。だから、人口が減っていく、全体が減っていくと、これはどこも同じなんだろうけれども、何とか教育だけでも、ちょっとそれは、子どもたちは未来をつくるんですから、未来ですよ、我々はもうあれだけれども、子どもたちには少しお金をかけていいと私は思います。

○瀬野尾委員

それはまさに、今、教育委員会が進めているコミュニティスクールの発想で、課題を地域と共有していくという、それがいい形で進めば、ともに、じゃあどうするんだという話になっていきますよね。その一環として、別に1世帯500円にこだわるわけではないですが、いつも私、思うんですが、社会福祉のほうって、結構お金があるじゃないですか。どうして教育のほうはお金がないのかなって思うんです。それは、我がこととして、次を育てるとして、これはすぐ町長さんにそうしてくださいと言っても難しいでしょうが、私たち住民がそういう気持ちになって、次の子どものために、とにかく幾らでも学校を支援しようというのも一つのあらわれだと思うし、まさにほかの村の話で恐縮ですが、学力最低の村が、まちぐるみで取り組んで、全国一位までなったというのも、やはり学校だけではなく一緒にやった結果ですので、今、おっしゃったコミュニティスクールの発想は、うんと大事にやっていく必要があるんだろうなと思いますね。

○櫻井町長

さっきから、予算のことも大分でてますが、ただ町とすれば、町を存続するかしないかというのは、やはり人を育てるということが大事なのかなと、そういうことを、まず根本的に持っておいて、どういうふうにするのかということだと思うんですね。

この間、この会議を持つ前に、教育委員からこういったことでお話ししたいと言われたときに、特色ある学校の五小は云々ということで、だったら五小に山学校させろと。そして英語だ

けで、もう全部英語だけにしちゃえと。だから、そういうことでやらないと、本当に特色なんか出てこないのではないかという、ちょっとお話をさせていただいたんだけれども、いずれ、委員さんの人たちもみんな言われているんだけれども、多分、10年というのは、小学校も中学校も一緒になっているような気がするんですね。一貫校にもうなってくるような気がする。国のほうも、そういったほうに指導してくるんだろうと思っていますから、そのときには、今も一小はどうなのか、二小はどうなのかというのは、まだ10年後はちょっとシミュレーションしていませんけれども、そろそろそういったことも考えなくちゃならない。

前のこういう会議で、本町は北とこちらと2つの学校でいいのではないかというのが、再三お話を承っているので、ただそこに特色というものがあって、それは人数も何も余り規制しないで、そちらに行って、例えば子どもが心に病を持っている方たちがそこへ行って、何か一つ、一皮むけて育ってくるのであれば、またそれはそれだろうし、やはりいろいろな考え方があるんだろうなというふうには思って聞いていました。

○佐藤委員

英語の町だったら、もう相当集まると思いますね。

10年以上前に、現職でまだ英語が一つも話がない頃に小学校で、英語の研究開発校というのを3年間やったことがあります。そのときに、ほかの市町村から、どのようにしたら塩竈二小に入れるんですかという問い合わせが物すごく多かったんです。

○内海教育長

英語をやって。外部からですね。

○佐藤委員

はい。

○櫻井町長

この間、ちょっと話がそれますけれども、議会の教育民生常任委員会の議員さん方が第一小学校に行って、瀬野尾先生の授業を聞いた。個人的に何人かの議員から聞いたんだけれども、議員さん方が思っている英語教育と、実際行って見た英語教育、ギャップがすごかったようで、いや、あそこまでいっているとは全然思わなかったというお話で、それはそうじゃないかなと思いながら、議員の方々は、恐縮して帰ってきたようであります。ありがとうございました。

○瀬野尾委員

お恥ずかしい授業だったんですが。いやだけど、ちょっと今の話でよろしいですか。

私たちから見れば「I want to watch何々」なんていうのは、ごく簡単な一つの文じゃないかと思うんですが、やはり日常日本語を話して生活している子どもたちにとっては、もちろん大人にとっても、英語で話をするというのは相当な壁だって、やってみて思うんですね。あの一つの文は、なかなか次の時間まで保持はできないんです。そうしたときに、もし松島が英語を使う学校でいこうとするならば、日常的に英語を、学校で使えとなれば、もう日常的に使うことになりますけれど、これは本当に具体的な話ですが、海外留学生は、松島という日本文化ですよ、日本文化遺産のあるここで安く下宿させるとか、部屋を貸すとか、（「いろいろな波及につながる」の声あり）すばらしいんです、松島って。そうなんです。そうすると、日常的に、もう外国人とも接するし、海岸に行かないと会いませんもの。高城町にいて、ほとんど外国人にお会いしませんよ、役場にいる方は別ですけれども。だから、それほどやはり、環境が大事だと思うんですね。だったら、もし英語でいくんだったら、そういう面でも考えていかな

きゃいけないなと。

先ほどの山は、私、松島の山は最高だと思っているんです。実は、よく森の学校ってありましたでしょう、もう東松島が先にやってしまいましたけれども。あそこの課題は、森を知っている人がなかなか地域にいないという課題があるのに、松島はいらっしゃるんですよね、森林組合初め。こんなすばらしい財産ないと。もう、すぐできます、松島、森の学校は。どうしてやらないんですなんてうつうつしながら言っていたんですが。そういうものがいっぱい、松島ある。海だってそうですよね。観光課の前のロジャーさんと、カヌーとか島を拠点にした海の学校というのも松島ならできるよねという話で、松島が今、ちょっと海のレジャーの開発が少し遅れ気味じゃないかと。だから、海の漁業ということだけではなく、海を場にしたレジャーを子どもたち、だからもう1週間だ5日と言わないで、夏休み3週間松島で過ごそうのキャンペーンを発信すれば、絶対集まると。もちろんお金もいただくということで、指導者はいっぱいいると、ずっと思っているんですがね。これはあとは、具体化、いやもっと揉むことが必要だと思うんですが。だから、さっき赤間さんのおっしゃった五小を存続するという、今回のテーマで、それが果たしてどうなんでしょうといったときに、今のこととあわせて考えていければ、また村が開かれていく一つにもなるかなと。

○鈴木委員

環境は、いっぱい整っていると、松島はと。

具体的な提案する場を、つくったらいいんじゃないですか。自由に提案する企画的な。

○瀬野尾委員

やれるところから、森の学校をやろうよと生涯学習班の松島のまる学の一つとしてやりましょうよ、もうあそこの長松園の森をといったら、あそこはマムシがいると言われた。そうなんですか。マムシがいるので危ない。だったら、そこに対するケアを具体的に考えればできるよねという話をしたことがありましたね。マムシいるんですか。

○櫻井町長

いや、いないとは言わないけれども、いたらだめなのかといったから、だって生存するものしようがないから、それに対応してどう生きるかというのが、また勉強なので。

○瀬野尾委員

そう。それに対するケアを考えながら、やれるとすれば、松島のそういうまる学とかへ取り入れても。ただもう一つ、そうすると、今、学校はいわゆる教科学習にすごく押されているんです。そういう山や海を舞台にした教育は大きいんだけれど、丸一日潰れるんですよね。そこの問題があるんです。授業時数が足りなくて、学校が困る。

○内海教育長

授業時数にいくと、結局また失速してしまうんですけれども、たくさんいい話がある、海のレジャー、それから外国人の宿泊させながら工夫してもらうというのもいいアイデアだし、山の学校もいいんですけれども、やはりそっちに触れてしまうと、どうしても。だけどそこを、例えば五小に、今ちょっと話が広くなったので、一、二、五だけの中でも五小だけに特化していきますと、五小なんかも、やれることはまだまだ、時数ふえるんですけれども、やれるようなことはたくさんあるような気がしますので、そこら辺について、やはり検討していく必要があるんだろうと。

ただし、当たり前のことでは、多分、鈴木委員さんのお話しするように、人も集まらないだ

ろうし、子どもたちもだんだん少なくなっていくんだろうとは思いますけれども、ただ、10年先が、例えば今、町長がお話ししたように、一貫校の話が出てくるまで、そのまま待っていていいんですかという話にもなりかねませんので、教育委員会としても、やれる部分はやる。ただ、教育委員会だけではないサポートもある程度必要にはなってくるのではないかなという感じは、私自身、ちょっと今、皆さんのご意見をお聞きしながら聞いておりましたけれども、何かまた、これにご意見加えていただくことはありませんか。

○瀬野尾委員

今、町長さんがおっしゃった、10年先には一貫校になるだろうという（「確実ではないですが」の声あり）もちろん、もちろん。でも、国も規模のことを考えたときは、松島はやはりその規模に当てはまるなと思っているんですね。そのときは、じゃあ待っているのか、または、今回こういう話をしたときに、あわせて考えていくべきなのか。私はあわせて、できることは言うけれども、長期的にはそこを念頭に置いて考えていかないといけないんじゃないかなと思うんですが、きょうの話は、それとは別なんですか。

○内海教育長

そうでなくて、そういう限定はしていませんので、だから今のお話のように、第五小学校あるいは第二小学校より拡大して一小、二小、五小あるいは中学校、特色ある学校を目指すんだけれども、並行して、例えば小中一貫校のことを考えていくというふうなことで、昨年の総合教育会議の中で、小中一貫校を話題の一つとしていたので、その小中一貫校についても、メリットはあるし、デメリットはあるし、それも含めてやっていく必要があると。ですから、小中一貫校を最初から排除しているつもりではないです、私は。お金がないからどうのこうのという意味ではないです。どうでしょう。

○鈴木委員

例えば、今、小中一貫校でもいいですけれども、やはり想定して、先駆けて取り組むということをやっていかないと、国がこうだからといって後追いになったら、地域どこも特徴出せなくなると思うんです。だから、特徴を出すためには、もう何ぼかそういうのも先駆けて、ちょっと少しリスクもあるでしょうけれども、少し先駆けて取り組むという、何かやらないと、また特色は出せないと思うんですよ。そんなもんだと思うんですよ。だから、やはりそのためには、少し、抵抗とかいろいろ必ずあるんですけれども、ただ、それは地域と一緒になって早めにそういうのは何かやるという、動くということが極めて私は大事だと思いますね。何でもですけれども、特色出す。だから、また来年は、今度予算もあるんでしょうけれども、何か一つ、来年、再来年度でもいいでしょう。何か一つ、その準備は設けると、つくらなきゃならないと思いますね。こういうことをやって、特徴、奇をてらうと言われるかもしれないけれども、でも、そうじゃないと特徴、特色はつくれない。

○内海教育長

鈴木委員さんの話で、特色というキーワードがたくさん出てきましたので。赤間委員さん、何かございませんでしょうか。最後のほうになりましたけれども。

○赤間委員

鈴木先生がおっしゃったこととか、瀬野尾先生のお話のとおり、やはり特色というのを、今のうちから考えながら、最終的には10年後になるのか20年後になるのかわかりませんけれども、最終的に多分、小中一貫校で五小もなくなって、1カ所に中学校と小学校があって、そこに子

どもたちが通うという形になるとしても、もしかしたら、今、各学校で特色ある教育をやろうとしているのが引き継げるような状況に持っていっておけば、別に今の、もし各学校で英語の特化したものとか、さっきの山の学校だったり森の学校、海の学校、そういったものが、例えば小中一貫校になったって、できるような流れさえつくっておけば、何ら影響ないのかなというような気はするんですね。

なので、そうなるまで、ただ漠然と待っているのではなく、瀬野尾先生おっしゃったように、やはり今、動き出してやっておくのが、結局、子どもたちはずっと学校に通い、勉強しているわけなので、今の子どもたちを大事にしていくのは、最終的には松島の将来につながることだと思うので、同時並行でという鈴木先生のお話のとおり、やはりやられていくほうがいいのかなと感じました。

○内海教育長

ありがとうございます。実先生。

○佐藤委員

地域のコミュニティというのは、やはり子どもたちの声が聞こえなくなると、地域というのは寂しくなるから、やはり地域の人たちって、さっき赤間委員さんが心配していたんだけれども、くぬぎ台の人たちが7割だと、その人たちは、今、やはりあそこに団地をつくって働き盛りですよね。ですから、自分の子どもが出た学校に協力する気持ちというのは、これはあるんだろうというふうに思います。今、ボランティアという意識が強いから、ですから、やはり仕事が、子育てが終わって仕事が終わるようになったら、あの地域、自分の学校というのに、そういう気持ちが親御さんたちもなってくるんじゃないかなという思いはあります。

浦戸は、本当に1人しかいないんだけれども、やはり子どもたちの声が聞こえると、物すごく勇気をもらうし、高齢化しているから、地域で何とかしなくてはいけないという思いが、やはり一人一人にあるそうですよ。子どもたちがめんこくてめんこくて。やはりそれが、コミュニティというのはだんだんと、今は新しく来られた方には、意識が忙しくてないかもしれないけれども、そういうふうに育っていくんじゃないかなという思いを、私はしておるので、ましてこれから意図的にコミュニティスクールをつくろうとしているわけですから、余計育ってくるんじゃないかな、地域のそういうのが醸成されてくるような気がして、私は地域が、特認校になったら、もしかしたら意識がどうなのかというのは心配は、私はしていません。

○内海教育長

ありがとうございました。瀬野尾先生。

○瀬野尾委員

もう十分、お話ししました。

○内海教育長

いえいえ、そんなこと。

○瀬野尾委員

もう私も、いろいろな特色をこれから松島は実行する段階だろうと。そのときに、10年先を見据えて、ベクトルをそちらをずっと見ながら、そこへいろいろな工夫を持っていければ、いい形になるのかなと思います。ぜひ、実行していくということ。一つでもいいから、まず実現していきたいなと思います。

○内海教育長

一通り、委員さんのご意見をお伺いして、キーワードとしては、やはりコミュニティというもののあり方を、やはり分析する必要があるだろうと。特色というのも出していかなきゃならない。ただ、特色についても、普通ある特色がいいのか、英語とかあるいは、ひょっとすると全く奇をてらったやつでどんと打ち出したほうがいいのかというようなのも、ご意見をいただきました。

それから、10年先のことということで、これも予算とか絡んでくるところがございますので、そういうのも踏まえながら、ご意見いただいたのを、これで終わりとすると、またここで切れてしまいますので、これを具体的にはどういうようにやろうとか、そういうような議論も、また進めていかなきゃない。そのときには、また町長さんとご一緒で、この総合教育会議の中で話題として出してこなきゃならない部分もありますので、一旦、きょうのご意見をいただきながら、時間をいたずらに延ばすつもりはございませんけれども、とにかくまた再度、教育委員会のほうで練りながら、あるべき姿を模索していきたいなと。とりあえず、第五小学校についてを最優先にしながら、鈴木委員さんからも、どきっとするような、いずれ減っていくというようなお言葉もありましたけれども、減っていくかもしれないですけれども、今、2年先、3年先の子どものことも考えていかなきゃならないので、その子たちを考えながら、うまく対応していければと思っております。

ちょっとこんな程度で、十分にお話、よろしいでしょうか。

〇鈴木委員

授業時数って逃げられないんですかね。

〇内海教育長

これ、特区になれば、授業時数逃げられるんです。ただ、特区がもうとっているところがあるので、そんなに特区、特区とやれるのかどうかというので、ちょっとこれは、今、話の中で出たので、本当に鈴木委員さんがおっしゃるように、奇をてらったやつまでやるとするならば、特区というのを考えてやったほうがいいのかなとは。

〇鈴木委員

時数に縛られてたら、何もできない。

〇瀬野尾委員

実質を証明できればいい。実際に子どもが伸びて、こんないいというか、何をよしとするかもありますけれども。

〇内海教育長

ただ、特区になってから、実質評価を求められるので、特区にならないのにカリキュラムを変えてやるわけには、これはもう、法に抵触しますので、それはできないんですけれども、とにかくあと、教育委員会で調べてみまして、後で、しかるべきどこかで教育委員さんには説明を差し上げます。あと、町長にも私のほうから説明したいと思いますので、そんなに多くはなかったような気がしますけれども、ちょっと聞いてみます。

よろしいでしょうか。

では、以上で、先ほどちょっと簡単に私まとめましけれども、それも踏まえて、教育委員会で、さらに具体案を検討して、早い時期に、またテーブルに乗せたいと思いますので、一応、私の司会の役目はここまでということで、よろしくお願いします。

４．閉会

○櫻井班長
　長丁場に当たり、議論していただきましてありがとうございました。
　まず、以上をもちまして会議の一切を終了したいと思いますので、本日はありがとうございました。

この会議録の作成者は、次のとおりである。

平成31年2月15日
松島町総務課総務管理班　主査　大久保　哲也